



一般社団法人 日本コンテンツ振興機構

晩夏の候、いかがお過ごしでしょうか。

CPO-JP 会報 7-8 月合併号をお届けいたします

1. ご挨拶

副理事長 小山 昌孝

2. 「AP 圏プロジェクト」に関しミーティングを行いました。

会員
高倉 誠司

3. フランスでのプレスコ収録記

事務局長
飯嶋 浩次



4. 事務局からのお知らせ

事務局

1. ご挨拶

一般社団法人 日本コンテンツ振興機構の会員の皆様、残暑お見舞い申し上げます。

ここ三か月の間にも、6月のブレキジット (Brexit) の造語も生まれるほど、英国の EU 離脱問題で世界経済は大きく揺れました。7月には国内に於いて参議院選挙後、金銭問題に端を発した前東京都知事の舛添氏辞任に伴う都知事選で、与党、野党の推す候補を破り、小池元防衛大臣が就任し、今月の8月、リオ・オリンピックで日本選手の大活躍によって、過去最多であったロンドン・オリンピックでのメダル獲得数が、まだ開催中にもかかわらず越えるという、悲喜こもごもの出来事が起こっています。



日本コンテンツ振興機構 副理事長

小山 昌孝

デジタルハリウッド大学大学院 客員教授

アニメーション制作企業を取り巻く環境に於いては、中国经济成長の鈍化であっても、アニメ、ゲームといったコンテンツマーケット(アニメーション市場)の拡大が続いています。しかし、人件費高騰による制作コストの増大によって中国へ進出した日本企業は、その制作基盤の脱中国が余儀なくされています。

他方、これは私的な解釈ですが、ジャパニーズ・テイストの人気は中国に於いても高く、現状、中国の制作会社ではそれを超えることはできていない。これは喜ばしいことですが、増大する中国資本によって、肝であるジャパニーズ・テイストを持つ日本企業、そのものを買収するという事象が進んでいることも事実です。

对中国に於ける日本企業は、安価な制作人材を求めて制作基盤の中国移転を初めて久しいが、その環境は大きく変化しました。

現在、増大するマーケットに向かいつつ、買収を目論む中国資本に如何に対応していくか、難しい舵取りが求められていると言っても過言ではないと思います。

国内に目を向けて、アニメーションの制作基盤を地方再生の切り札としてあちらこちらで検討されていることを耳にしますが、いくらアニメーションが好きな若者が大勢いたとしても、3K, 4K, いやそれ以上と言われる劣悪な環境、低賃金では、正直、何処の学校の就職担当の先生に勧めて頂けるか疑問です。面接で十中八九、「将来を考えればもっと固いところに行くように」と、助言すると思います。ここにも解決しなければいけない抜本的な問題が横たわります。

地方に進出する企業は少なくともその地に、最低50人から100人規模の人材を確保しなければならないと推察します。また、その地域に就職までに一定のスキルを身に付けるための教育機関が必要です。然しならそれを中長期的に遂行するため産学官での取り組みは不可欠ですが、それば別途述べるとして、前記した「チャイナリスク」に如何に迅速に対応するかを、本機構として考えていかなければなりません。その一策として、本会報の高倉さんの記事をお読み頂ければ幸いと存じます。

2. 「AP 圏プロジェクト」に関しミーティングを行いました。

一昨年から CPO-JP に参加させて頂いて居ります高倉と申します。
会報に参加させて頂きますのはこれが初めてとなります。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

さて、前回の運営委員会で小山副理事長からお話しがございました、「アジアパシフィック圏への製作発注・事前調査」に関し、8月15日にスタジオディーン様でミーティングが行われました。

7月の運営委員会では広瀬様にご参加頂き、特にフィリピン・ミンダナオなどの状況、各種情報を頂きました。

今回のミーティングでは、伊藤理事から「単に調査を国から委託されると言うより、5年後10年後を見据え、『日本企業が安心してアニメーション製作発注』をする事が出来るスキームを作ってゆくようにすべき」という意見が出、一同同じ意見でした。

キーワードは「文化交流・人材育成から始めよう。」

それにより、今後の方向性として「パートナーシップを結べる国を政府から提案頂き、そこに対し調査を行い、その後、実際の仕事発注やコンサルティング、製作委員会モデルなどのビジネスモデルまで伝えてゆくなどの動きをしてゆこう」という事になります。

参加メンバーは

小山昌孝 様	野口和紀 様	伊藤暢啓 様	斎藤成史 様
飯嶋浩次 様	尾関康美 様	高倉誠司	

でした。

私としては、個人的に「海外と未来志向のスキームを作ってゆく」事に携われるのは、とても面白く、エキサイティングに感じます。

今後の業界にとってとても大切な事に関わりますので、細心の注意を払いながら、大胆に進めるよう微力を尽くすつもりです。

今後とも何卒よろしくお願いいたします。



日本コンテンツ振興機構
会員
高倉 誠司
エスティコンサルティング事務所
代表

3. フランスでのプレスコ収録記



去る6月21日に弊社制作のCGショートムービー「誘拐アンナ」（監督：佐藤懐智）のフランス語によるプレスコを、フランスはパリにて収録してまいりました。

この時の様子などをコラム記事として寄稿いたします。



日本コンテンツ振興機構
事務局長

飯嶋 浩次

株式会社スタジオディーン
デジタル部 部長

本作品「誘拐アンナ」は70年代のカルトムービーをモチーフとしたロードムービーで、映像作家である佐藤懐智氏の企画・監督作品です。いわゆる商業アニメーションではなく、主に海外の映画祭に出品し受賞することを目的とした作品です。

従って音声は日本語ではなく外国語—今回はフランス語—での収録が必須でした。

当初は日本国内での収録も考えましたが、役者の選定や演技指導などを考えると現地での収録が良いとの結論になりフランスでの収録となりました。

とはいえ、フランスの役者に自由に演技をされても後々困るし、キャラクターの微妙な演技のニュアンスはなかなか文章や通訳を通しての説明では伝わらないと考え、ガイドとして先にビデオコンテで日本語で収録を行い、それに合わせて（セリフのニュアンスは感じてもらう事を期待して）フランス語を入れてもらう「吹き替え方式」をとりました。

収録スタジオはアニメの吹き替えに慣れていて、役者の手配もできるということを条件に、現地コーディネーターの意見を聞きつつ決めたのが今回お世話になった STUDIOS VOA

(<http://studios-voa.com/>) です。

将来的に英語での吹き替えも想定しているので、マイアミにもスタジオがあるのが決め手でした。（・・・と値段も！）

STUDIOS VOA はパリの郊外モントルイユにあります。日本で言うと山手線の外側、高円寺あたりでしょうか。蚤の市でも有名な街ですね。

6月のパリとしては異例の大雨のなか、タクシーで1時間ほど走ってスタジオに到着。

スタジオは入り口から細長い建物の中に収録ブースが4つとミキシングルームが1つ、他にポスプロスペース、ミーティングスペース、事務室などがやや無理やり効率よく配置されていました。今回使用したのは収録ブースのうちの一つ「PINKBOX」です。

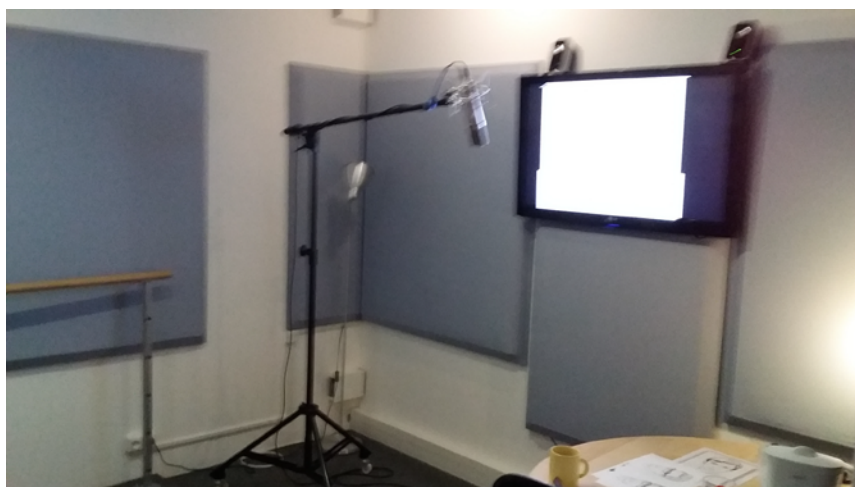


スタジオ外観

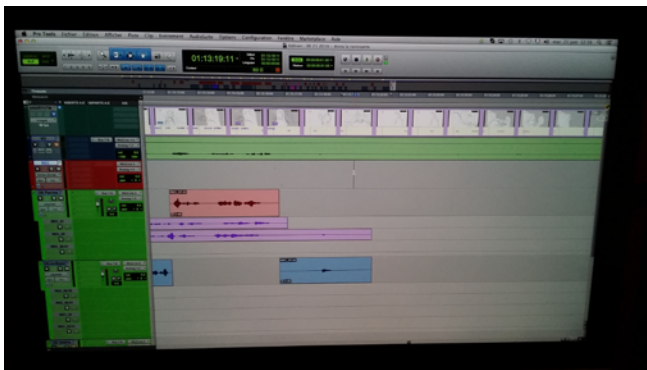


スタジオ内、エンジニアと監督

エンジニアルームは写真のようにピンクと黒を基調としたデザインです。調整室はエンジニア+ディレクター+2人で一杯というぐらい。収録ブースは3人同時収録がギリギリという広さです。



主な機材は、コンソール：DIGIDESIGN PRO CONTROL、マイク：Neumann U87、プリアンプ：SPL Tube Preamp、
スピーカー：ミディアムとスモール（メーカー未確認）、モニターミキサー：Omnitronic MZD 88、仕様ソフト：Protools、VoiceQ・・・等々。
吹き替え収録がメイン業務のスタジオだけあって、音声収録に特化している印象です。



Protools 画面。レイアウトの癖が日本とは違う？



マイクは日本でもお馴染み Neumann U87

最も海外らしいのが "VoiceQ" というソフト。海外アニメのメイキングなどで、役者さんが台本を持たず画面に流れるセリフをみながら演技している映像をよく見かけます。その映像とテキストをシンクさせるのがこの "VoiceQ" というソフトのようです。

(デモ映像 <https://www.youtube.com/watch?v=PvYP7FeELnU>)

吹き替えで、個人もしくは少人数で行う収録には使い勝手が良さそうです。セリフの変更もその場で即反映できるので便利です。

台本のページをめくる音を気にする必要がなく、顔を下に向けないようにしながら台本を見erという特殊技術も必要なくなりますので、演技に集中しやすそうではあります。

反面、日本のように大人数での収録にはテキストが入り乱れるので使いづらいでしょう。台本にある状況説明としてのト書きは当然表示されないので、日本式のアフレコには不向きなように思います。日本で普及しないのはそのせいでしょうか。台本の印刷が不要と割り切れば、若干のコストダウンにはなりそうですが・・・。

今回、演じてくれた役者は3人。それぞれオーディションを経て監督が選んだ役者さん達です。皆さん日本のアニメの吹き替えには慣れていて、中の一人は宮崎アニメの主演を演じた方もいました（作品名は失念）。この方は娘さんにナウシカ（！）と名付けるほどの宮崎アニメファンだそうです。

収録自体は役者さん達が手馴れているのと、エンジニア（美人）の手際の良い段取りのおかげで4時間ほどで終了。

驚いたのは日本だと半分ほど収録が終わったら休憩を入れるのですが、ここでは休憩なしが基本のようでした。

休憩はしないのかとエンジニアに聞くと、「倒れるまでやります」と体育会系な答えが……。お願いをして10分ほど休憩をしてもらいました。役者も「えっ？休憩あるの？」って顔をしてましたが。



手前が監督と私。右がエンジニア。後方は役者さん達

終了後にスタジオのマネージャーとデータのやり取りの段取りをしている中で、もしリテイクがあるならスカイプで指示を受けながら収録もしますよ、と申し出がありました。

このスタジオは日本のアニメだけではなく、アメリカ、韓国などのアニメ吹き替えも行っているの（数はアメリカが多い）そういったコミュニケーションツールを使用した遠距離からのディレクションにも対応しているようで、それには驚きました。

（監督は録り直しができる喜んでましたが、プロデューサーとしては勘弁して……）

異常気象とも言える雨続きのパリでのプレスコは、このように終始明るく和やかに作業を終えることができました。

フランスでの初めての収録は、アプローチや考え方の違いなど新鮮な驚きとともに貴重な体験でした。

4. 事務局からのお知らせ

- ・平成 28 年度第 2 回理事会は 9 月 30 日(金)16：00 より開催いたします。
開催日が近くなりましたら、開催場所を含め改めまして事務局より御案内申し上げます。

編集責任者 専務理事 野口 和紀

ご意見・ご感想は下記の事務所までご連絡ください。

一般社団法人日本コンテンツ振興機構

〒180-0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町 4-4-13

事務局 TEL: 0422-35-3305 FAX: 0422-70-3073